

2012年 和本で見える書物史

第1回 和本とは何か

はしぐち 橋口
こうのすけ 侯之介



自己紹介: 本職は神田神保町の古本屋主人。岳父の薫陶を受け30年経った。その経験を生かして2005年に平凡社から『和本入門—千年生きる書物の世界』を出版。翌年から成蹊大学の学部と大学院で「文献学共通講義」等で講義するようになった。2007年には『続和本入門—江戸の本屋と本づくりと』を刊行（いずれも現在は平凡社ライブラリー）。2011年6月『和本への招待』（角川選書）を上梓。現在、雑誌「古書通信」誌に「江戸の古本屋」を連載中。

神田古書店街

東京・千代田区の神田神保町には現在160軒の古書店が並ぶ。そのほか、出版社・新刊書店など多数が集中する本の街である。各古書店は専門化し、それぞれが得意な分野を持って商売をしている。インターネットでは「じんぼう」で検索。

古書の市場も神田にあって、毎週火曜日は江戸時代以前の書物である和本（古典籍ともいう）を専門に扱う「東京古典会」という市場もある。業者だけの市だが、ここで毎週たくさんの和本が取引される。秋には年に一度一般向けの大きな市が開かれる。



和本という用語

<http://jimbou.info/>

和本とは、有史以来明治初期まで日本で作成された書物全体をさすことば。印刷された「版本」と手書きの「写本」の両方が含まれる。江戸時代に実際に使われた用語で、これに対することばは唐本（中国で出版ないしは書写されて日本に輸入された本）である。

本講義の主眼

和本は今でもたくさん出てくる。神田の古書店街でもいくつかの店で見られる現役の書物である。しかし、その割に実際に見る機会が少ないのではないか。図書館も容易に見せてくれない。実物を見ないと作品が、どう読まれ、伝えられてきたのかという点が理解できないこともある。文学を研究するために、書物そのものをよく知ることが必要で、書物の歴史、様式などを基礎知識として持つべきである。本講義はそのための訓練の場としたい。

毎回、和本を持参するので、実物に触れてもらう。オリジナルのオーラを感じ取ってほしい。

近世の日本は世界的な書物大国だった

江戸時代260年間に出版は飛躍的に伸びた。寺子屋（読み書きの師匠）などの発展で庶民にいたるまで文字が読めたため、江戸後期には1万部を超えるベストセラーも出たばかりでなく、あらゆるジャンルの書物がつくられて、大衆的な読者層を開拓して伸びてきた。それが豊かな書物の世界を形成したのだ。この強固な読者層があり、現代の日本の出版状況にも影響を与えている。

講義の要旨はpdfにするので、http://www.book-seishindo.jp/seikei_tanq/ でダウンロードを。

質問は、専用メールでいつでも。 khashi@s.email.ne.jp

出席（適宜）、受講態度、レポート（中間に適宜、及び期末）などから総合的に評価

テキスト

前期:『和本入門—千年生きる書物の世界』、橋口侯之介、平凡社ライブラリー、¥1470

後期:『江戸の本屋と本づくり—続和本入門』、橋口侯之介、平凡社ライブラリー

参考文献は、その都度紹介する